日本人専門家が酷暑の中技術伝授

江心洲の百名近くの農民が学ぶ

取材　沈湘偉　干光磊

本紙の取材によると、昨日 37 度の酷暑にもかかわらず、「日中生態循環型農業新技術普及会」参加中の日本人専門化はわざわざ江心洲へ出向き、田んぼの中で百名近くの農民に「青空授業」を行った。参加者は大変勉強になったという。

昨日午前 9 時、松沼憲治氏、斎藤春夫氏らの日本人有機生態農業専門家は江心洲にやってきて、農民らの栽培過程であった具体的な問題について現場での質疑応答を行った。取材によると、松沼憲治先生は今年 76 歳で、昨年 5 月に有機肥料の利用を普及するため、江心洲を訪れている。そのため、今回顔見知りの農民たちと再会して、とても親しみを覚えるという。多くの農民らは、教わった有機肥料はすでに使っていて、大変役立っていると話している。一平村の女性陸玲さんは、鶏糞等の有機肥料を使ったおかげで、うちのキュウリは昔よりずっと美味しくなったと記者に告げた。半信半疑で食べてみたら、本当にしゃきしゃきで美味しかった。

お昼ごろ、松沼憲治氏らは灼熱の太陽の下、農家倪建明氏（58 歳）の畑へキュウリの成長状況を見に行った。黄色くなっていたキュウリの葉っぱを目の前にして、倪さんはとても心配そうな様子。松沼さんは一通り状況を聞いた後に、この様にアドバイスをした。有機肥料の使用量をさらに増やして、複合肥料は減らし、或いはやめてもいいという。倪さんのキュウリがかかっているのはウドンコウ病で、昔は農薬で防除していたが、根本的に駆除できないばかりか、作物が薬物耐性まで生じてしまうとのこと。その他、土壌亀裂が発生しているのに対して、作物の根茎断裂の原因になるので、正しい措置は土壌の表面に稲藁を被覆したうえ、よく水分を補充することと松沼氏は倪さんに指導した。

作物病虫害の根本的な原因はやはり土壌だ。良い作物を作るためには、良い土作りをしなくてはならない。それ以外、栽培中にあった連作障害も実は地力不足が原因だ。土作りをしっかりしていれば、同じ作物を毎年同じ土地に栽培してもまったく問題がないと、松沼氏は農民らに向かって丁寧に教えた。

松沼氏は自分の長年の実践と改良を重ねた有機堆肥づくりの方法を農民らに説明した。それを聞いた王さんは記者にこう話した。この方法はとても簡単で、コストもほとんどかからないから、普通の農家でも自分で作れる。そして、地力が大幅に上がるので、いい収益になるし、味も文句なし！

午後 3 時、「青空授業」もいよいよ終盤に入った時には、専門家たちはすでに全身が汗まみれになっていた。市の関係者によると、今後、専門家らが説明した技術をパンフレットに印刷し、各農家に配る予定という。

（京江晩報　2008 年 7 月 6 日　取材　沈湘偉　干光磊）